

ピーチ・マッスル・ビューティー



嵐龍

《前回のあらすじ》

すべてはここから始まりました

 ストームドラゴン
@seven_dragons

#筋肉で解決する昔話

かぐや姫に求婚した男たちは、8月の満月の夜までに肉体を鍛え上げ、輝く筋肉美を以て月からの迎えを撃退した。

かぐや姫はドン引きし村人達はその姿を恐れ、彼らを"鬼"と呼び島へと追いやった。

後の「鬼ヶ島」である。

次回『ピーチ・マッスル・ビューティー』

昔々、あるところにおじいさんとおばあさんがいました。

ある日、おばあさんが川から大きな桃を持ち帰ってきたところから、この物語は始まります。

おばあさんが台所から包丁を持ってきて、いざ桃を切ろうと刃物を振り上げた瞬間、桃が破裂し、中から赤ん坊が出てきました。

赤ん坊は片膝を付いて、赤ん坊にしては筋肉が付いた腕で身体を抱き、姿を現しました。その雄々しい姿は、まるでオリュンポスのヘラクレスのようであると、おじいさんは言いました。おばあさんは、おじいさんが何を言っているのか理解できませんでした。

赤ん坊は顔を上げると、小さい身体からは想像ができないほどの野太い声で口をききました。

「我は美を求め、この世に生を受けた。桃から生まれるとは予想外ではあったが、これも何かの縁であろう。うむ、決めたぞ！今日から我が名は桃太郎である！ご老人方、今日からよろしく頼むぞ！」

雄々しいどころじゃない。立派すぎる。しかも、勝手に名前を決められた。

衝撃的な出会いではあったが、捨て置くにも捨て置けず、おじいさんとおばあさんは桃太郎を育てることにしました。



数年が経ち、桃太郎は自称日本一の筋肉美を持つ立派な少年に育ちました。桃太郎はおじいさんの畑仕事を手伝いながら、毎日筋トレを行い、筋肉美を追求する日々を送っていました。しかし、のどかな田舎ではその力を発揮できないように、自慢の肉体を持てあましているよう

でした。

ある日、桃太郎は村に降りました。村では、桃太郎は人気者で、キビダンゴのように白い球肌から浮かび上がる筋肉を称賛し、尊敬を得ていました。村に桃太郎が姿を現すと、皆一目見ようと集まってきましたが、その強靱な肉体に恐れを抱き、誰も桃太郎に話しかけようとはしませんでした。

桃太郎が村で筋トレを行っている、村人の話声が聞こえてきました。

村のはずれにある海に浮かぶ島から、夜になると叫び声が聞こえ、漁師が恐ろしがって島に近づけないというものでした。伝説では鬼が住んでいるということでした。

桃太郎は、自らの肉体を試し、鬼を倒す絶好の機会だと思い、島に向かう決心をしました。



桃太郎はおばあさんからプロテインを受け取り、島へと向かいました。

島へ向かう途中、三匹の家来が仲間になりました。犬、猿、キジは桃太郎の美しい筋肉に惹かれ、自分達も桃太郎のような立派な肉体を手に入れたいと弟子入りをお願いしました。桃太郎は最初、弟子をとる気にはなりませんでしたが、気晴らしには良いだろうと渋々受け入れました。桃太郎は、家来たちが懸命に筋トレを行っているのを見て、優越感に浸っていました。桃太郎の周りには、桃太郎より立派な肉体を持つ者がおらず、自分こそが日本一だと、村人と家来たちを見下し傲慢になっていました。

おばあさんからもらったプロテインの量が残り少なくなった頃、桃太郎一行は島に到着しました。

島の洞窟の入り口に着くと、桃太郎は「今まで鍛えた力を見せてみる」と家来たちを先に行かせ洞窟を進みました。桃太郎は、もし鬼が強ければ家来たちを囷にして逃げるつもりだったのです。



洞窟を進むと、暗闇から五つの影が姿を現しました。桃太郎は筋肉でとてつもなく恐ろしい力を感じ取り、背を向けてその場から逃げようと思いました。すると、後ろから家来たちの叫び声が聞こえ、桃太郎は耐え切れず走り出しました。桃太郎の頭の中は、島からの脱出方法でいっぱいではなく、家来たちと旅をした日々の思い出でいっぱいでした。桃太郎は、鬼の前に立ちほだかり、家来たちを守ろうとしました。すると鬼の一人が口を開きました。

「どうやら貴様に足りぬものを理解したようだ。島に入ってきたときからこの筋肉で感じておったわ」

一人目の鬼は微笑し、そう言いました。

「ここを去れ。そして成すべきことをしろ」

そう、二人目の鬼が言いました。

桃太郎は家来たちを連れて、洞窟を出ようと思いました。鬼に背を向けた桃太郎は、肩越しに鬼たちに問いかけました。

「最後に質問がある。お前たちの肉体はなぜそんなに醜くも美しい？」

五人の鬼たちは答えました。

「愛だよ」

「愛とは醜いものだ」

「自分よがりで、押し付けがましく、脆い」

「しかし、それゆえに」

「繊細で、儂く、美しい」

「「「既にお主も分かっておろう？」」「」」

桃太郎は、どこか悟ったような顔で家来たちを連れ、その場を去りました。



桃太郎一行は夜の穏やかな波に揺られ、島を後にしました。桃太郎は家来たちにこれまでの心境を話し、謝りました。家来たちは謝罪を受け入れ、これからも家来のままでもいいと頼みました。桃太郎はその言葉を聞き、生まれて初めて声を上げて泣きました。

海を渡る途中、島から響く声が聞こえました。その声は恐ろしくもどこか悲しげで、まるでこの声が遠く彼方まで届けと思わんばかりの咆哮でした。

夜空を見上げると、そこには美しい満月がひかり輝いていました。



桃太郎一行は村に帰り、桃太郎は家来たちの指導をしながらおじいさん、おばあさんと桃の農園を拓きました。桃太郎の育てた桃は、白く美しく、食べる事を躊躇するような桃でなく、誰からも親しまれるような美味しい普通の桃でした。村人たちにも評判が良く、以前より桃太郎に親しくするようになり、桃太郎も以前のような攻撃的な肉体ではなく、人を暖かく包み込むような優しい肉体に変わりました。

こうして桃太郎は、「愛」を宝として、村へと持ち帰ったのです。

めでたし、めでたし